

短 報

自閉症児・者支援に対する視点変化のプロセス — TEACCH トレーニングセミナー受講者の語りから —

永見史織^{*1} 小林信篤^{*2} 佐々木正美^{*2}

はじめに

TEACCH(Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children)は自閉症と関連するコミュニケーション障害の人のための包括的な支援プログラムとして世界的に高い評価を受けている^{1,2,3)}。TEACCHでは自閉症児・者本人への直接的なサービスだけでなく支援者に対する研修なども行っている。そのひとつにTEACCH夏期研修がある。この研修は5日間で構成され、理論についての講義と自閉症児・者への構造化の実践が組み合わされている¹⁾。この研修では25人の支援者の訓練を行う。TEACCH夏期研修は、講義、実演、実習、フィードバック、フォローアップの組み合わせで構成されている。内容は自閉症の特性、アセスメント、構造化された指導法、行動マネジメント、コミュニケーション、自立・職業スキル、ソーシャルスキル、そして余暇スキルである⁴⁾。Grindstaff⁵⁾はTEACCHの原則や手法を身につけ、構造化による指導の利用を増加させるために、TEACCH夏期研修が有効であったと述べている。

このTEACCH夏期研修をモデルとした研修が日本でも行われている。開催期間、受講者数などは運営主体により異なるが、基本的な構成や内容はTEACCH夏期研修とほぼ同じである。日本のTEACCHトレーニングセミナー(以下トレセミ)は1989年に初めて東京で開催されて以来、その後もさまざまな運営主体により継続的に日本各地で行われており、拡大、発展してきている^{3,6,7)}。寺尾ら⁸⁾のレポートによると、トレセミでは参加者から極めて高い評価を得ることができたと報告されている。しかし、トレセミの効果を実証的に証明した研究はない。

本研究では受講者の変化を探索的に研究するため

に、トレセミ受講者の自閉症児・者支援に対する視点の変化とそのプロセスを明らかにすることを目的とした。研究方法には受講者の語りにも焦点を当てた質的研究法を採用した。さらに、変化のプロセスを明らかにするという点を鑑み、木下が提唱する修正版グラウンデッドセオリアプローチ(以下M-GTA)を用いることとする⁹⁾。

方 法

1. 調査対象

調査対象は、2008年から2009年の間に日本で開催されたトレセミの受講者である。調査対象者は15名で性別は男性4名、女性11名であり、その内訳は学校教育従事者6名、障害者福祉従事者4名、医療従事者1名であった。

2. 調査方法

データは2008年9月から2009年2月にかけて収集した。インタビュー内容は①トレセミの受講動機について、②トレセミの中で得られた学びや認識の変化について、③その学びや変化のきっかけについて、の3点であった。インタビューは半構造化面接により行い、上記3点を意識しつつ、調査協力者が自由に語れるよう配慮した。インタビュー時間は1人平均1時間であった。インタビュー内容は本人の許可を得てすべて録音し、逐語録に文書化した。

3. 分析方法

分析方法はM-GTAの手順に従った。その際、分析テーマである「自閉症児・者支援の視点変化のプロセス」に焦点を当て分析した。分析では、分析ワークシートを活用し、継続的比較検討分析を行い、概念生成、カテゴリー生成を行った。さらにカテゴリー間の関係を検討し、結果図を作成した。

4. 倫理的配慮

調査協力予定者に対して研究目的、研究方法、調査対象者等について文書を用いた上で口頭での説明

*1 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 医療福祉学専攻 *2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科
(連絡先) 永見史織 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-Mail: w5108004@std.kawasaki-m.ac.jp

を行った。また、調査協力を拒否する権利があること、拒否をしても不利益がないこと、プライバシー保護について説明を行い、承諾を得た上で研究を行った。

結果及び考察

M-GTA による分析の結果、1つのコアカテゴリー、4つのカテゴリー、10のサブカテゴリーが生成された。これらのカテゴリーを比較検討した結果、結果図とストーリーラインを作成した。表記についてはコアカテゴリーを【 】,カテゴリーを《 》,サブカテゴリーを で表した。また、インタビューによる受講者の語りは下線で示した。

1. ストーリーライン

受講者はトレセミに参加する中で、トレセミのプログラムに従う、構造化^{†1)}の実施に チームで取り組む、トレーナーのアドバイスを受ける などの《トレセミに導かれる》影響を受けながら、《その子にピントを合わせていく》という【導きによるピント合わせの体験】をする。《その子にピントを合わせていく》過程の中で、受講者は構造化を やってみる ことと その子に合わせて修正する ことを繰り返すことで、次第に その子に合った構造化ができる ようになっていた。

【導きによるピント合わせの体験】を通して、受講者は《ストンと落ちる》実感を伴いながら ピント合わせの手法がわかる ようになり、さらに「支援者主体」だった自分に気付ける ようになっていた。そして、ピント合わせが成功につながる実感をもつことにより「その子中心」の重要性の実感へと至る《「その子中心」への視点変化》が生じていた。

2. TEACCHトレーニングセミナーのプログラム

受講者が《「その子中心」への視点変化》に至るためには《トレセミに導かれる》影響が大きな要因となっていた。トレセミのプログラムに従う ことで受講者自身が普段行っている構造化とは違ったやり方を体験する。それが《その子にピントを合わせていく》プロセスである。

受講者数人でチームをつくり、議論を重ねる中で《その子にピントを合わせていく》ことに チームで取り組む ことも、トレセミのなかにプログラムとして組み込まれている。チームでピント合わせに取り組むことについて、受講者は「職場だと同僚であればいいのかもしれないけど、そんな時間もないし、なんとなくやって終わっちゃっ。」と語っており、多くの受講者は実際の支援現場で《その子にピントを合わせていく》ことや チームで取り組む ことを

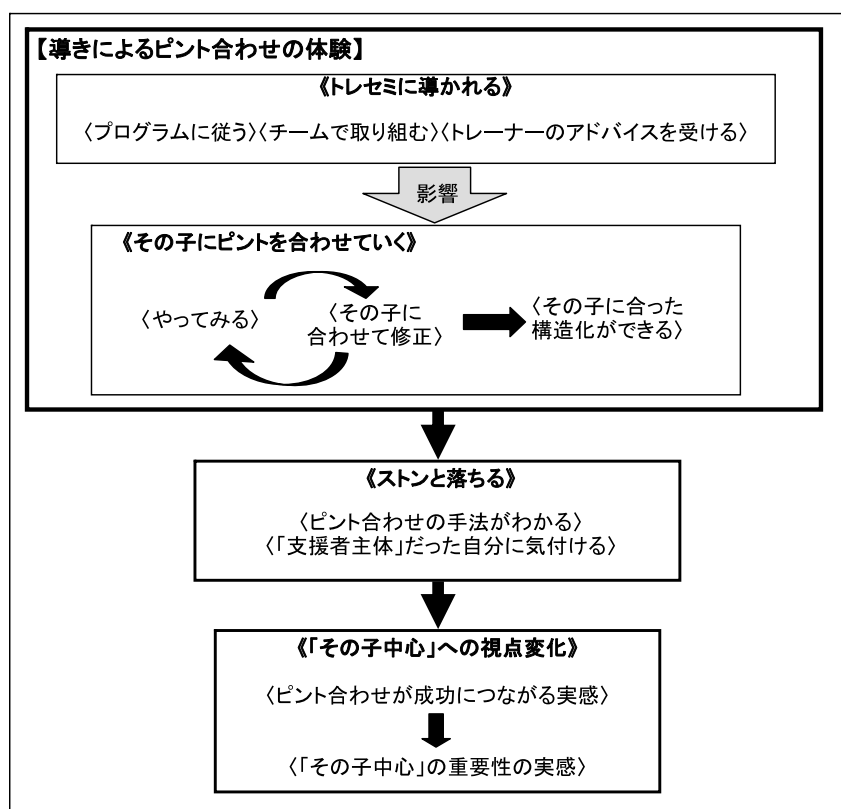


図1 トレセミ受講者の視点変化のプロセス

十分には実践できていなかった。

また「自分でやってた時は思い込みの部分もあつたりしたので、やっぱりトレーナーの先生の視点というのを教えてもらったのがよかった。」と語られているように、トレーナーのアドバイスを受けることで受講者は安心してピント合わせに取り組むことができ、その子に合った構造化ができるように導かれていた。「できる」というポジティブな体験により、その後の《ストンと落ちる》理解や《「その子中心」への視点変化》が促進されていた。

このように、トレセミのプログラムは【導きによるピント合わせの体験】ができるように仕組みされており、《「その子中心」への視点変化》に至るために重要な役割を果たしていた。

3. 「支援者主体」であった自身への気付き

受講者がトレセミ参加以前の自身を振り返って「日課に さんを沿わせるにはどうしたらいいかっていうところになっているんだと思う。」「ある手法に子どもたちを当てはめようとしていた。」と語っているように、受講以前は「その子中心」に考えているつもりでいながら、日課に沿わせたいという支援者の都合や特定の構造を中心とした「支援者主体」の支援を行っていたことがわかる。受講者は「その子中心」の支援の必要性を頭では理解しつつも、実行することができていなかった。受講者はトレセミを通して、「その子中心」のつもりだったが実際は「支援者主体」だった自分に気付くようになっていた。また、それは「頭だけじゃなく心にストンと落ちてくる」ように理解することができたと語られていた。この《ストンと落ちる》実感は、その子に合った構造化ができるというポジティブな体験により促進されていた。

4. 「その子中心」への変化

「今まではね、『ああ、この子わからないんだな』で済ませたことも、わかるようにこちらが手だてをすればわかるようになるんだってということが実感で

きましたね。」というように、受講者は「その子に合った構造化ができる」ことによって自閉症児・者が環境をより理解できるようになり、自立的に課題に取り組む様子を目の当たりにすることで、「その子中心」に考えてピント合わせを繰り返し、その子に合った構造化をすることが重要であると実感できていた。

自閉症児・者支援の現場ではクラス全員に同じ構造化を行ったり、支援者の意図に沿うように子どもたちを強制的に動かそうとしたりというように TEACCH の構造化が誤解されたまま使われていることもある¹⁰⁾。より有効な構造化を行うためには「その子中心」の視点をもつことが必要である。この観点からも、受講者がトレセミを通して「支援者主体」だった自分に気付き、「その子中心」へと視点を変化させたことには大きな意味があるといえる。

おわりに

本研究から、受講者はトレセミに参加することで「支援者主体」だった自分に気付き、「その子中心」へと自閉症児・者支援に対する視点を変化させていたことが明らかとなった。本研究では M-GTA を研究方法に採用したが、トレセミ受講者の変化のプロセスとその要因を探索的に知るための方法として適切であったと考える。今回の分析では受講者の職種、職歴、経験などはほとんど関係ない結果となったが、これらの受講者の属性によって違いがあるのかどうかは明らかにすることができなかった。また、本研究では受講者に視点を当てて研究を行ったがトレセミを実施する側の課題には触れることができなかった。これらについては今後の課題としたい。

本研究を行うにあたり多大なるご理解とご協力を賜りました受講者の皆様、ならびに自閉症協会、発達障害者支援センターをはじめとする関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

注

†1) 構造化とは自閉症の人の特性に沿って環境を整えることであり、環境や文脈の意味理解を助け、自立した生活が送れるようにするための工夫である。構造化には、①物理的構造化、②スケジュール、③ワークシステム、④視覚的構造化、の4つの要素がある¹¹⁾。

文 献

- 1) Mesibov G, Shea V, Schopler E : *The TEACCH approach to Autism Spectrum Disorders*, Springer, New York, 1-200, 2004.
- 2) Gold Medal Award for Life Achievement in the Application of Psychology. *American Psychologist*, **61**(5),

- 396-398, 2006.
- 3) 朝日新聞厚生文化事業団：自閉症の人たちを支援するということ TEACCH プログラム新世紀へ．朝日新聞厚生文化事業団，第4刷，東京，28-77，2003．
- 4) Schopler E：Principles for directing both educational treatment and research, Diagnosis and treatment of autism, May 8-10, 167-183, 1989.
- 5) Grindstaff JP：Further evaluation of TEACCH's experiential training programs, Change in participants' knowledge, attributions, and use of structure, Doctoral dissertation, University of North Carolina-Chapel Hill, 2000.
- 6) Schopler E, Lansing M and Olley JG：自閉症の治療教育プログラム．第15版，ぶどう社，東京，86-185，1997．
- 7) 下田茜：専門家育成のためのトレーニングセミナー．小林信篤，TEACCH プログラムによる日本の自閉症療育，初版，学習研究社，東京，212-220，2008．
梅永雄二：3 デイズトレーニングセミナーの開催．小林信篤，TEACCH プログラムによる日本の自閉症療育，初版，学習研究社，東京，232-237，2008．
- 8) 寺尾孝士，鈴木伸五，大場公孝：TEACCH プログラムにおける現場職員のトレーニングについて．情緒障害教育研究紀要，(16)，32-41，1997．
- 9) 木下康仁：修正版グラウンデッドセオリーアプローチ(M-GTA)の技法．富山大学看護学会誌，6(2)，1-10，2007．
- 10) 内山登紀夫：TEACCH の考え方．佐々木正美，自閉症の TEACCH 実践，初版，岩崎学術出版社，東京，15，2002．
- 11) 藤岡宏：自閉症の特性理解と支援 — TEACCH に学びながら —．初版，ぶどう社，東京，65，2007．

(平成21年11月16日受理)

**The Process of Changing the Viewpoint in the Support of Individuals
with Autism Spectrum :
From the Interviews of Trainees Attending a TEACCH Training Seminar**

Shiori NAGAMI, Nobuatsu KOBAYASHI and Masami SASAKI

(Accepted Nov. 16, 2009)

Key words : TEACCH, autism spectrum, training for professionals,
modified grounded theory approach (M-GTA)

Correspondence to : Shiori NAGAMI

Master's Program in Social Work
Graduate School of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail: w5108004@std.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.19, No.2, 2010 347-350)